2024 年聖典に親しむ会京都担当範囲
大義門功徳問答　一切所求満足功徳　結由

大義門功徳

問答（2）

問曰。以名召事。有事乃有名。安樂國既無二乘女人根缺之事。亦何須復言無此三名耶。
答曰。如軟心菩薩不甚勇猛譏言聲聞。如人諂曲或復儜弱譏言女人。又如眼雖明而不識事譏言盲人。又如耳雖聽而聽義不解譏言聾人。又如舌雖語而訥口噁吃譏言唖人。有如是等根雖具足而有譏嫌之名。是故須言乃至無名。明淨土無如是等與奪之名。

問ひていはく、名はもつて事を召く。事あればすなはち名あり。安楽国にはすでに二乗・女人・根欠の事なし。またなんぞまたこの三の名なしといふべけんや。
答へていはく、軟心の菩薩のはなはだしくは勇猛ならざるを、譏りて声聞といふがごとし。人の諂曲なると、あるいはまた儜弱なるを、譏りて女人といふがごとし。また眼あきらかなりといへども事を識らざるを、譏りて盲人といふがごとし。また耳聴くといへども義を聴きて解らざるを、譏りて聾人といふがごとし。また舌語ふといへども訥口蹇吃なるを、譏りて・ 人といふがご とし。 かくのごとき等ありて、根具足せりといへども譏嫌の名あり。このゆゑにすべからく「乃至名なし」といふべし。浄土にはかくのごとき等の与奪の名なきことあきらかなり。

問答（3）

問曰。尋法藏菩薩本願及龍樹菩薩所讃。皆似以彼國聲聞衆多爲奇。此有何義。
答曰。聲聞以實際爲證。計不應更能生佛道根芽。而佛以本願不可思議神力攝令生彼。必當復以神力生其無上道心。譬如鴆鳥入水。魚蚌咸死。犀牛觸之死者皆活。如此不應生而生。所以可奇。然五不思議中佛法最不可思議。佛能使聲聞復生無上道心。眞不可思議之至也
　問ひていはく、法蔵菩薩の本願（第十四願）、および龍樹菩薩の所讃（易行品） を尋ぬるに、みなかの国に声聞衆多なるをもつて奇となすに似たり。これなんの義かある。
答へていはく、声聞は実際をもつて証となす。計るにさらによく仏道の根芽を生ずべからず。しかるに仏、本願の不可思議の神力をもつて、摂してかしこに生ぜしめ、かならずまさにまた神力をもつてその無上道心を生ずべし。 たとへば鴆鳥の水に入れば魚蚌ことごとく死し、犀牛これに触るれば死せるものみな活るがごとし。かくのごとく生ずべからずして生ず。ゆゑに奇とすべし。しかるに五不思議のなかに、仏法もつとも不可思議なり。仏よく声聞をしてまた無上道心を生ぜしむ。まことに不可思議の至りなり。

一切所求満足功徳

一斉所求満足功徳
衆生所願樂一切能滿足

此二句名莊嚴一切所求滿足功德成就。佛本何故興此願。見有國土。或名高位重潛處無由。或人凡性鄙悕出靡路。或脩短繫業制不在己。如阿私陀仙人類也。有如是等爲業風所吹不得自在。是故願言。使我國土各稱所求滿足情願。是故言衆生所願樂。一切能滿足是故願生彼阿彌陀佛國此二句結成上觀察十七種莊嚴國土成就。所以願生。釋器世間清淨訖之于上。

衆生所願楽　一切能満足

　この二句は荘厳一切所求満足功徳成就と名づく。

仏本なんがゆゑぞこの願を興したまへる。ある国土を見そなはすに、あるいは名高く位重くして、潜処するに由なし。あるいは人凡に性鄙しくして、出でんと悕ふに路なし。あるいは修短、業に繫がれて、制することおのれにあらず。阿私陀仙人のごとき類なり。 かくのごとき等の、業風のために吹かれて自在を得ざることあり。このゆゑに願じてのたまはく、「わが国土をしておのおの所求に称ひて、情願を満足せし めん」と。このゆゑに「衆生所願楽　一切能満足」といへり。

是故願生彼阿彌陀佛國

此二句結成上觀察十七種莊嚴國土成就。所以願生。釋器世間清淨訖之于上。

是故願生彼　阿弥陀仏国

　この二句は上に十七種荘厳国土成就を観察するは、願生する所以なることを結成す。器世間清浄を釈すること、これ上に訖りぬ。

①−1.

問うて曰わく。名は以て事を召く。
名は事物、ものからを示す。召く「お呼びになる 招く の尊敬語」)

事有れば乃ち名有り。
ものがらが有れば すなわち名がある。

安楽国には既に二乗・女人・根欠之事無し。
安楽国にはすでに、二乗、女人、根欠などのものが存在しない。
極楽浄土の別名。
阿弥陀の浄土を極楽浄土という。(大宇宙には数えきれない程の仏様がおられ それぞれの浄土がある)
亦何ぞ須く復此の三の名無しと言うべけんや。
また、どうして ことさら この三つの名前までないといわねばならないのか。

答えて曰わく。軟心の菩薩甚だ勇猛ならざるを
意志の弱い菩薩は少しも勇猛でないので

譏りて声聞と言うが如し。
これもそして声聞というようなものである。

(宙) 264 265.
「菩薩」は 弟子に自をさらして生きる者。
けっして割り切らない、どこまでも率直!
従って生きる勇気をどこに押える。
「女人」は無弟子に答えの中に安らいしまうのが女人性。
「根欠」は 問う能力、感覚をもたない!
キルケゴール 人間にとって一番問題は、問わなければならないことから身をそらし気晴らしをしていること。
根欠というのは そういう一切を気晴らしにしてしまう存在、あり方。
仏道実践をも気晴らしにする。
けっして自覚にならず そのことにおいて自らの気晴らしをする。

P298、
女人、根欠、二乗ということは、もともと苦悩から遠い名。
女人 ② → 自分自身に幻想を抱き、幻想に酔える
根欠 → 問題意識の欠如、問題を感じ (P) 感覚の欠如
二乗 → 自己容認 (A)

P302
苦悩することからもっとも遠い存在が大義門功徳で押えられている。
— 共通にじつは苦悩しない

'24-05-23 19:00 宛先-0822723965 蓮▲逢信元-国田 P00

①-2

(食) P270、菩薩というのは、「大丈夫」という益荒男、男性性をもっている。菩薩とは菩提心に生きるものだが、その菩提心を源信は「虚空共闘」虚空と共に闘うという言葉で表わしている。「虚」は虚仮なる生死界、「空」は涅槃界で、そのどちらにも縛をおかされない、不住の精神が菩提心である。どこまでも仏法を問い直し、仏法に照らして生活を凝視していく。

268 自己の内面において不断の問いを生きるものが菩薩である。

「女人」という言葉でいわれているのは生理的な女性という意味ではない。
(イ) 女人とは、自らに酔える存在。

P271. 根欠(ア)問題意識の欠如、その場合、なにが欠如しているかというと問うという心が欠如している。問うということが欠如とは、苦悩する心が欠如する。だいたい凡夫は苦悩するというが、本当に苦悩できるのは菩薩で、我々は苦悩できない。真に苦悩に徹することができない。
本当に絶望することもない。いつもどこかケロッとしている。そういう姿が根欠としてあざえられる。根欠は悩むことがないので

P272、結構な存在であるが、悩むことがないということは、他の人々とつながることがないという意味をもってくる。本当の人間的つながりには断絶の自覚がある。お互いに理解しあえるものだという楽天的なところに、本当の人間の出あいはない。
無有代者(だれも代る者なし)私は私の業を引きうけるほかない。その重さの自覚です。その重さの自覚だけが真に出あわしめるのです。根欠とはそういう重さを

273 意識することができない存在です。存在の重さ、そういうものに対する感覚が欠如している。
根欠には真に人としてのつながりというものが成り立ちえない。

(U-5)

P274.

二乗 → 声聞の問題は信仰における閉鎖性
(A)' 絶対者の言葉にすがって生きるもの
縁覚は信仰における独善性。

一乗つまり大乗はいかにして閉鎖性と独善性を越えていくかという歩み。
声聞ということで二乗小乗を代表させるので本願第十四 声聞無数の願 p17
「たとい我仏を得んに国の中の声聞、能く計量(はかり)ありて、下は三千大千世界の声聞・縁覚、百千劫において ことごとく共に計校(けきょう)して その数を知るに至らば正覚を取らじ」

◎ "わたしが仏になる時、私の国の声聞の数に限りがあって、世界中のすべての声聞、縁覚が、長い間、力をあわせて計算して、その数を知ることができるようなら、私は決してさとりを開きません。"
藤田徹文「人となれ仏となれ」
声聞とは、如来の声を聞く人です。「国内の声聞の数に限りがない」ということは、すべての人を選別することなしに受け入れる世界を実現しようという誓い。

'24-05-23 19:00 宛先-0822723965 華▲送信元-国田 P0002/0006 T-366 U-494

②

解 81.

自分の気持をまげて人にこびへつらうこと、こびへつらう心は仏教に背く。

人の諂曲なると或は復寧弱なるをたとえばこびへつらったり、弱弱しい男をもって女人という

識りて女人と言うが如し。
ようなものである

又眼明なりと雖も事を識らざるを
又眼は見えるがものごとを識らない者をもって

盲人と言うが如し。又耳聴なりと雖も義を
盲人と言うようなものである。　又、耳は聴えるが、義を聞いても

聴て解らざるを識りて聾人と言うが如し。
理解しないものをもって聾人(つんぼ)というようなものである。

又舌語ると雖も訥口噤吃なるを識りて唖人と言うが如し。
又、舌はものを言えるが、口べたであったりどもったりする者をもって唖人(おし)と言うようなものである。

官 p269. 人間の女人性を「諂曲」つまり媚び諂う。
また「寧弱」どちらも弱さです。たとえ男であっても諂曲寧弱なものは、女人性です。「女人」ということでたとえてくるものは弱さです。ヒューマニズムの立場から言えば弱さというのは決して罪ではない。それは、かばうべきもの、庇護すべきものであって決して罪として批判すべきものではない。しかし求道生活においては、弱さは致傷になる。つまり弱さは求道において、徹することができない。常に中途なるものです。求道生活における弱さです。

p270、求道生活における弱さは、自分は求道している、道を歩んでいることに酔える。本人はひたすら求め続けているつもりなが、その実は、求めている自分に酔える、それはまったく歩みを止め自己肯定です。

'24-05-23 19:01 宛先-0822723065 蓮▲送信元-岡田 P0003/0006 T-366 U-494

③

是の如き等の根有りて具足せりと雖も譏嫌之名有り。

このように器官が揃って具足していても そしり、嫌う名がある。

是の故に、須く乃至名無しと言うべきこと

だから「譏嫌の名無し」という必要があることは明らかである。

明らかなり。浄土には是の如き等の

浄土にはこのようにちぐはぐな名は無いのである。
与奪

与奪之名無し。

与えること 奪うこと

問うて曰わく。法蔵菩薩の本願及び なぜ十四願か。

法蔵菩薩の本願(十四願)及び

龍樹菩薩の所讃を尋ぬるに、皆彼の国に

龍樹菩薩の弥陀を讃えられたところを尋ねると 皆 彼の安楽国に
「十住毘婆沙論」

④

(解)82

声聞衆多なるを以て奇なりとするに似たり。

声聞の人々が多いことをもって奇特のすぐれている ことしているようであるが、

此れ何の義か有るや。

これはどのような義(意味・わけ)があるのか。

答えて曰わく。声聞は実際を以て証と為す。

(解)84. 涅槃の異名.

声聞は実際に身を滅し去って涅槃に入ることを証りとしている

究極の根源

計るに応に更に能く仏道の根芽を生ずべからずして、

このことを考えると声聞のさとりはそれ以上に仏道の根本たる菩提の芽を生ずることはできないはずである。

仏本願の不可思議の神力を以て接して彼に生ぜしめ、

仏は本願の不可思議な神力をもって声聞をつつみ入れ、彼の安楽国に生ぜしめ、

必ず当に復神力を以て基の無上道心を生ずべし。

その上にまた神力によって、必ず無上の菩提心を生ぜしめるのである。

(解)84.

阿羅漢の声聞は身を滅し智を滅した無余涅槃の境地もってさとりとし、そこから一歩も動こうとしない「智度論」にはこういわれている。

「阿羅漢は大慈大悲なし、本願願もって一切衆生を度することなし。また実際をもって証とする。已に生死を離るが故に」

P331

(にう)

「根芽」自ら芽を出す力のないもの。しかも転じられる。声聞がしかも真に菩薩としての徳を成就するという意味が浄土の徳がみられる

332 声聞は自利の精神、自利に終始する。その自利のすがたが、そのまま利他の徳をあらわす。

⑤

毒ヘビを食べる。

(解) 中国に伝えられる毒鳥の名、大きさは驚程で その羽を
漫しに酒を飲めば死ぬという。

住生要集 塔 1142.
安心集 ㊥ 222.

譬えば鴆鳥の水に入らば魚蝟咸く死す。
たとえば鴆鳥が水の中に入ると魚やはまぐりなどがみな死んでしまう。

犀牛の之に触れれば死せる者皆活えるが如し。
犀のつのがこれにふれると死んだものが活きかえるというようなものである。

此の如き応に生ずべからずして生ず。
このように生ずるはずがないのに、生ずるから奇特なのである。
@おこらないはずのものに菩提心を起こさせるものだからこれを不思議とするのである

所以に奇とすべし。

聖 P190.
両重の目録
P336
多い 少ないではなく 多い。
(解) 84 五不思議
P337 ① 器世間不思議(器世間の数が無限でいつまでも尽きない不思
② 業力不思議(業の力によって人間が千差万別の結果を得る不思
③ 龍力不思議(龍神が雨を降らせる不思議)自然の
P338 ④ 禅定力不思議(禅定の力によって神通変化をなす不思議
P326 ⑤ 仏法力不思議(無明を転迷開悟せしめる不思議)
声聞性を突破するものは未証の自覚(まだ覚らずということの自
この未証の自覚のところに開かれてくるのが聞の精神。
大義門功德に声聞が成仏するということが聞というところにみられる
聞ということを貫いているのは、自らを痛み悲しむという心

(解) 82.
然るに五不思議の中に仏法最も不可思議なり。
だから五つの不思議のなかで仏法は最も不思議である。
「大智度論」

仏能く声聞をして複無上道心を生ぜしむ。
仏は声聞にふたたび無上の菩提心を生ぜしめる

真に不可思議の至りなり。
まことに不可思議のきわみである。

P334 不可思議と不思議のちがい。
(不可思議は思議すがらず　見心にポイントを押いて法に照らして情というものをおさえる。頭が下がったということがある。
不思議は、法の徳、讃嘆の言葉、仰ぎ見ての言葉。

'24-05-23 19:02 宛先-0822723965 蓮 送信元-岡田 P0006/0006 T-366 U-4

課題　一切所求満足功徳　　参考「解説浄土論註改訂版」

衆生所願楽一切能満足
　衆生の願楽する所　一切能く満足す
此二句名荘厳一切所求満足功徳成就。
　此の二句は、荘厳一切所求満足功徳成就と名づく
佛本何故興此願。
　仏本何が故ぞこの願いを興したもう
見有國土。或名高位重潛處無由。
　有る浄土を見そなわすに、或いは名高く、位重くして潛処するに由無し。
或人凡性鄙悕出靡路。
　或いは人、梵性鄙しくして出んと悕うに路靡し
或脩短繫業制不在己。
　或いは脩短繫業制するに己に在らず
如阿私陀仙人類也。
　阿私陀仙人の如きの類なり
有如是等爲業風所吹不得自在。
　是の如きの業風の為に吹かれて自在を得ざること有り。
是故願言。使我國土各稱所求滿足情願
　是の故に願じて言わく。我が国土各所求に称うて、情願を満足せしめん、と。
是故言衆生所願樂一切能滿足
　是の故に衆生所願楽・一切能満足と言えり。
是故願生彼阿弥陀仏国
　是の故に願わくは彼の阿弥陀仏国に生まれん。
此二句結成上観察十七種荘厳国土成就所以願生
　この二句は上の十七種荘厳国土成就を観察することを結成す。
釈器世間清浄　之上にりぬ
　器世間清浄を釈すること之上の

解説

（願生の行人である）衆生の楽う願いが（仏願力により）一切能く満ち足りる。
この二句は荘厳一切所求満足功徳成就と名付けられている。
仏は本来どのような理由でこの願を起こされたのかというと、
現実の国土をご覧になるに、
あるいは名前が高く、位が重いと潜み隠れていることができない。
あるいは人が凡そ性が田舎者であるために、出たいと望んでも、その路がない。
あるいは、寿命の長短が、業につながれており、自分で決めることができない。
　　阿私陀仙人のような類である。
こういうように、業のままに翻弄されて、自在を得ないことがある。
こういうわけで、願われて言われたことは、　　（真下さん資料）

「我が国土では各人の起こす、いろいろな欲求に沿いながら、さらに深い存在自体の願いを満足せしめよう。六情の欲楽を満足せしめよう。」と言われたのである。（解読浄土論註）

こうであるから、「衆生の願楽する所、一切能く満足す。」と言われたのである。

（感想）荘厳一切所求功徳成就

願生偈自体は、堤日出夫先生が願生偈の講義を、長く土曜会でされていました。よく読み下し?で、勤行も上げていて、出だしを言われると、後の偈文が空で出てくるくらいですが、その願生偈を詳しく説明された論註というものに、関わろうなどとは、思ってもいませんでした。ただどなたかが、願生偈の世界は、すでに浄土に生まれた人の世界の話とはなされたと記憶しています。

論註の勉強会は、仏法を聞いていくうえで、先師の説いてこられたことを訪ねていくことで、もっと深く御恩を知り、喜びを感ずることができるのではないかと思い、読書会のみ参加させていただいておりました。今回、参加を依頼されてから、真下さんからのたくさんの資料も読ませていただき、あちこちの会座に出ながら、いろいろ考えさせて頂きました。

解説を読む限りでは、

「人間にはいろいろな業を抱えて生きて居るものがあるが、その中でも、その機に応じて、ああなりたい、こうなりたいという、それぞれの欲求を叶えようとしながら、自分や、仏様の、本当の願いを満足できるようにしてあげよう。」

という功徳についてのお話と受け取らせていただきました。

しかし、今日、夜晃先生の本の読書会に参加しながら、

「如来の大悲によって、自利成就して成仏の道を生かされる我らは、同じ如来の大悲によって利他の大行をも成就することを得しめられるのである。」

というところが、中心点とお話があり、自分の本当の願いは、今はわからないけれども、本当の願いに生きたいという自利であり、仏様の願いを生きたいという利他なのではないか、と思えて来て、これは同じことを話されているのかなと思った事でした。

、　、

2024年聖典に親しむ会

眞下ひづる

「国土荘厳結由」　論註上(真宗聖教全書p298)

漢文

是故(＊故我)願生彼阿彌陀佛國

此二句結成上觀察十七種荘厳國土成就。所以(＊＊所為)願生。釋器世間清淨訖之于上。

＊浄土論(真全 p270)故我願生彼；浄土論註上(真全298)是故願生彼

＊＊所為願生(夜晃先生の恩徳記)所以(真全　解読)

是故に願くは彼阿弥陀仏国に生と

この二句は上に十七種荘厳国土成就を観察することを結成す。願生の所以に。器世間清浄を釈すること、之れ上に訖りぬ。

語句

訖　おわる　物事がいくところまでいきついて、終わりになる。類語　了

とまる　いきついてそこにとどまる　同義語　迄(キツコチ)

いたる　そこまでおよぶ

是故(故我)願生彼阿弥陀仏国

設問(1)なぜ安楽国ではなく阿弥陀仏国なのか

世尊我一心帰命儘十方無碍光如来願生安楽国

語句

安楽　大無量寿経(東p38)但有自然　快楽之音　是故其国　名安楽国

阿弥陀仏　阿弥陀経(東p128)　論註上(真全p282)　讃嘆門

「依舍衛國所説無量壽經。佛解阿彌陀如來名號。何故號阿彌陀。彼佛光明無量。照十方國無所障礙。是故號阿彌陀。又彼佛壽命及其人民無量無邊阿僧祇劫。故名阿彌陀。」

此二句結成上觀察十七種荘厳國土成就。所以(＊＊所為)願生。釋器世間清淨訖之于上。

設問(2)結由は三句ある。中句の「願生の所以」は前句(此二句結成…)につくのか。後句(釈器世間清浄…)につくのか。この区切り方の違いは意味の異なりをもたらすのか。

一、『解読浄土論註上』(p86)での区切り方は「所以願生」が前句につけて釈されている

この二句は上の十七種荘厳国土成就を観察することを結成す。願生の所以に。

器世間清浄を釈すること、之上に訖りぬ。

現代語訳(解読論註上p86)

この二句は、以上十七種の見事に飾りあげられた国土の完成を観察するところを結び成立させるものである。

「願わくは…生まれん」といわれているからである。

器世間の清浄なことを解釈することは以上でおわった。

二、『真宗聖教全書』(p297)での区切り方は「所以願生」が後句に続けられている。

この二句は、上の国土荘厳十七種の功徳成就を観察することを結成す。

願生の所以に器世間清浄を釈すること之上に訖ぬ。

現代語訳(私訳)

この二句は上で述べた十七種の国土荘厳が成就したことの観察を結成する。

願生したから器世間清浄を釈すことが上(観察十七種国土荘厳成就)で完了した。

設問(3)　観察十七種荘厳国土成就と釈器世間清浄との関係は？

考察

資料(1)『恩徳記』住岡夜晃師(p240)

第二十項　釈結由之文

故我願生彼阿弥陀仏国

「故」の字　上の「観」の字(観彼世界相)に応ず。「我」の言、建章の我(世尊我一心)と一なり。

「彼安楽国」と言わずして「彼阿弥陀仏国」と云うは「帰命儘十方無碍光如来」に応ぜんが為なり。

帰命と願生と、もとより唯一心に外ならず。

然れば「故」の字はその意、生信にあると云うべし。

上に「願生安楽国」と云う、是れ彼の世界の勝相を観ずるに依ってなり。是の十七句を観ずるに此法の不顛倒、不虚偽なることを知る。即ち十七句は勝過三界道の清浄功徳、又、是れ願心荘厳の不虚作真実功徳、故に十七種を観知する者は仏の本願を観ず。仏願力を観ずるが故に真実の浄信を生ず。されば

「観察十七種荘厳功徳成就所為願生」

「所為(以)」とは観以下の十一文字(観察十七種荘厳功徳成就)を云うのであり、偈文の「故」の文字に外ならない。「所為願生」と十七種観察の由致を示されるのである。

「所為願生」の「願生」は一心帰命をいう

願偈大意「示現観彼安楽世界　見阿弥陀仏　願生彼国」とあり、三種荘厳を観見して九方を捨て西方に願生す。

「所為願生」の願生は一心帰命を云う。起行の作願に非ず。長行の五念門を以って偈文に配釈せらるるも、その真意は一心の具徳を顕すにあり。今は直に偈の本義に依って願生の所由を釈成するなり。願生の所由とは三種成就願心荘厳の故である。長行の中に云く

「略説彼阿弥陀仏国土十七種荘厳成就　示現如来自身利益大功徳成就　利益他功徳成就故」

是れこの十七種は本仏所得の功徳にして二利円満の覚体たることを示す故に、如実に彼の国を(*)観知すれば衆生皆往生を成就することを知る。是れ即ち願生の所以なり。

されば下の観行次第を弁ずる後に云く

「観此十七種荘厳成就　能生真実浄信　必定得生彼安楽仏土」

語句

(*)観知『恩徳記』釈観察門(p9)

了知仏願生起本末　是為観知相　無碍光智　徹到心中故成就此智　是為生信の本

(**)器世間清浄を釈し、之を上に訖る。結成す。

語句

(**)器世間『恩徳記』釈観察門(p6)

器とは物を盛るを用となす。所依の国土は衆生を盛る所なるが故に、譬えて器となす。浄入願心章に釈して「器者用也謂彼浄土是清浄衆生之所受用故　名為器」という・・・

今、「世間」とは不思議世にして、阿弥陀如来本願力の所顕、実相常住の時に、依正主伴を其の中に於いて顕現するが故に「世間」と云う。。

考察

設問(1)なぜ安楽国ではなく阿弥陀仏国なのか

考察(1)なぜ安楽国ではなく阿弥陀仏国なのか

夜晃先生は「彼安楽国と言わずして彼阿弥陀仏国と云うは帰命儘十方無碍光如来に応ぜんが為なり」といわれている。帰命された仏如来の国を目指された。

私は国土観察を通して安楽という結果ではなくその根源を求める心が生じたからと思った。

設問(2)結由は三句ある。中句の「願生の所以」は前句(此二句結成…)につくのか。後句(釈器世間清浄・・・)につくのか。この区切り方の違いは意味の異なりをもたらすのか

考察(2)「願生の所以」は前の文につくのか。後の文につくのか。区切り方で意味が違うのか。

夜晃先生の釈では観察十七種荘厳功徳成就が願生をうみだす理由とされている。

私は願生には二段階あるように思う。前の文につくと観察から生まれた願生は召喚の声が聞こえその方向を向いた段階、後の文につくと浄土の環境を受用したというと得生者の想を持つ願生心が器世間清浄を成就させる段階をあらわしていると思う。

資料(2)『浄土論』

「起観生信」

彼観察有三種　何等三種　一者観察彼仏国土荘厳功徳　二者観察阿弥陀仏荘厳功徳　三者観察彼諸菩薩功徳荘厳

「観察体相」

云何観察彼仏国土荘厳功徳　彼仏国土荘厳功徳者　成就不可思議力故　如彼摩尼如意宝性相似相対法故　観察彼仏国土荘厳功徳成就者　有十七種　応知

「浄入願心章」

又向説観察荘厳仏土功徳成就　荘厳仏功徳成就　荘厳菩薩功徳成就　此三種成就願心荘厳　応知　略説入一法句故一法句者謂清浄句　清浄句者謂真実智慧無為法身故　此清浄有二種　応知　何等二種　一者器世間清浄　二者衆生世間清浄　器世間清浄者　如向説十七種荘厳仏土功徳成就　是名器世間清浄　衆生世間清浄者　如向説八種荘厳仏功徳成就　四種荘厳菩薩功徳成就　是名衆生世間清浄　如是一法句摂二種清浄義　応知

設問(3)　観察十七種荘厳国土成就と釈器世間清浄との関係は？

考察(3)　器世間(清浄)と荘厳国土(成就)の関係は？

私は国土荘厳は方向性を示す役割、器世間荘厳は浄土のはたらきを受け入れて生活することであると思う。国土が器世間になった転回点は観経次第「既に眼鼻等の触を知りぬ」で「須らく染を離るることを知るべし」にある。染が知らされるところに「仏恵の明らかに照らすを観」ずることができる。

資料(3)『恩徳記』住岡夜晃師(p239)

第十九項　釈一切所求満足功徳

上来国土十七句は体量性力作の如くの顕現せる二利円満不可思議の荘厳なり。此の十七種、一切所求満足に終われども、これを逆時に観ずれば一清浄に帰す。所謂入一法句之なり。

観察門中、器世間清浄分内、初めの起観を了る。

設問(4)「器世間清浄分内、初めの起観を了る」十七種

国土荘厳功徳成就の終わったところで夜晃先生が「初めの起観を了る」とおさえられた意は何か

考察(4)「器世間清浄分内、初めの起観を了る」　十七種国土荘厳功徳成就の終わったところで夜晃先生が「初めの起観を了る」とおさえられた意は何か

　夜晃先生の釈では結由の「故」が生信をあらわすものである。浄土の国土荘厳を観察することによって、「此法の不顛倒、不虚偽なることを知る。即ち十七句は勝過三界道の清浄功徳、又、是れ願心荘厳の不虚作真実功徳、故に十七種を観知する者は仏の本願を観ず。仏願力を観ずるが故に真実の浄信を生ず。」であるから十七種の国土荘厳の観察(起観)が願生という信心を生じる(生信)。

資料(3)

恩徳記第五章釈観察門第一節観察器世間荘厳成就第一項釈清浄功徳(p14)

1．示分斉

　此の清浄是総相とは一句の分斉を示す。下十六句を別相となす。・・・然るに十六句中には自ら三厳を具するが故に、此の中の総は即ち通じて三厳二十八句の総相である。

　故に此の句は下の一法句である下に入第一義諦を釈して此義至入一法句文　当更解釈と云い、情入願心章に於いて一法句者謂清浄句　清浄句者謂真実智慧無為法身故と云われるのがこれである。

この一句上にあっては真実功徳相、即ち是れ儘十方無碍光如来これである。光壽を全うじて往生即仏、主伴因果不二の徳体。これを清浄句と為し、総相と為す。所謂第一義諦妙境界相。本仏の自境界である

設問(5)清浄荘厳功徳成就の句(観彼世界相　勝過三界道)が清浄句であり一発句そのものであるという解釈をされている。これは「観彼世界相勝過三界道」という句が一法句そのものという意味なのか。

考察(5)

　夜晃先生の恩徳記の清浄功徳の釈を読んだとき清浄句＝一法句という関係のつけ方に違和感を感じたことをきっかけとして、それは真実と方便を抽象的と具体的という枠組みで整理しようとする私の発想の問題であることに気づかせていただいた。浄土荘厳の実体化もこの発想が生んでいるように思う。浄土をイメージの空間としてとらえることにより私を変えるはたらきを受けず見て楽しむものにして自分から切り離してしまう。イメージの世界に取り込むことによって全我にはたらきかけられることを避けようとする。法蔵菩薩の願いは私の心の中に浄土を建立することである。私の心は更地ではなくすでに我が占領して動こうとしない。そこに清浄を知らしめるための浄土を建てるご精進を私の生が尽きるまでされ続けるのが本願であると浄土論の国土荘厳を通していただいた。